

# 国宝「迎賓館赤坂離宮」と 片山東熊

文:網野ゆかり

平成28(2016)年から一般公開が始まった国宝「迎賓館赤坂離宮」。

もともとは大正天皇が皇太子(東宮)だったときに東宮御所として造られたものでした。

設計者は幕末生まれの片山東熊。

日本の近代建築の礎を築いた工部大学校造家学科第1回卒業生4人のうちの一人です。

「宮廷建築家」東熊の歩みをたどります。

『日本の建築 明治大正昭和2様式の礎』によれば、東熊は気に入らなければ何度も手直しさせ、万全を期したという。また、後進の指導にも熱心だったという  
右側写真1／正門・堀 2／正面外観 3／主庭 4／正面玄関 5／中央階段 6／彩鸞の間(暖炉) 7／彩鸞の間(暖炉) 8／花鳥の間 9／大ホール(絵画)  
10／大ホール 11／朝日の間 12／朝日の間(天井絵画) 13／羽衣の間 14／羽衣の間(天井絵画)

●迎賓館赤坂離宮の画像全点 出典:内閣府ホームページhttp://www8.cao.go.jp/geihinkan/akasaka/photo.html

片山東熊は安政元(1854)年12月、萩藩の城下町萩で生まれました。萩は吉田松陰を中心に尊王攘夷の志士を数多く育んだ地。そんな萩で育った東熊は數え年12歳のとき、松陰の門下生・高杉晋作が創設した「奇兵隊」に、2人の兄を追って入隊します。その奇兵隊で山県有朋の知遇を得たことが、その後の東熊を後押ししてくれることになります。

師は御雇い外国人コンドル。  
同期生は東京駅設計の  
辰野金吾

明治維新後、東熊は横浜でボーイとして働きながら英語を学び、明治6(1873)年、「工部寮(現在の東京大学工学部)」に入学します。同期生には、後に東京駅を設計した辰野金吾や、丸の内の煉瓦造のオフィス街を造った曾根達蔵らがいました。

工部寮は4年後に「工部大学校」となり、東熊らは若きイギリス人建築家ジョサイア・コンドルから西洋建築を学びます。コンドルは鹿鳴館やニコライ堂の設計で知られ、日本の建築の近代化に貢献した人物。東熊は在学

中、コンドルから西洋ではコンペが行われると聞き、政府の要人となっていた旧知の山県有朋の邸宅設計のコンペを造家学科で提案して行ったこともありました。

## 欧州の宮殿を視察へ

明治12(1879)年、工部大学校造家学科1期生として卒業した東熊は工部省に入り、コンドルが設計した有栖川宮邸の建築に関わります。そうした中で有栖川宮に随行して欧州の宮殿を視察する機会に恵まれます。

明治19(1886)年、東熊は皇居御造営事務局に出仕します。局長は幕末に欧州各国を視察した経験を持ち、明治天皇に信任された長州出身の杉孫七郎。東熊の出仕には東熊の兄たちと親しかった山県有朋の推薦もあったのではといわれています。

## 10年をかけて竣工した 東宮御所。

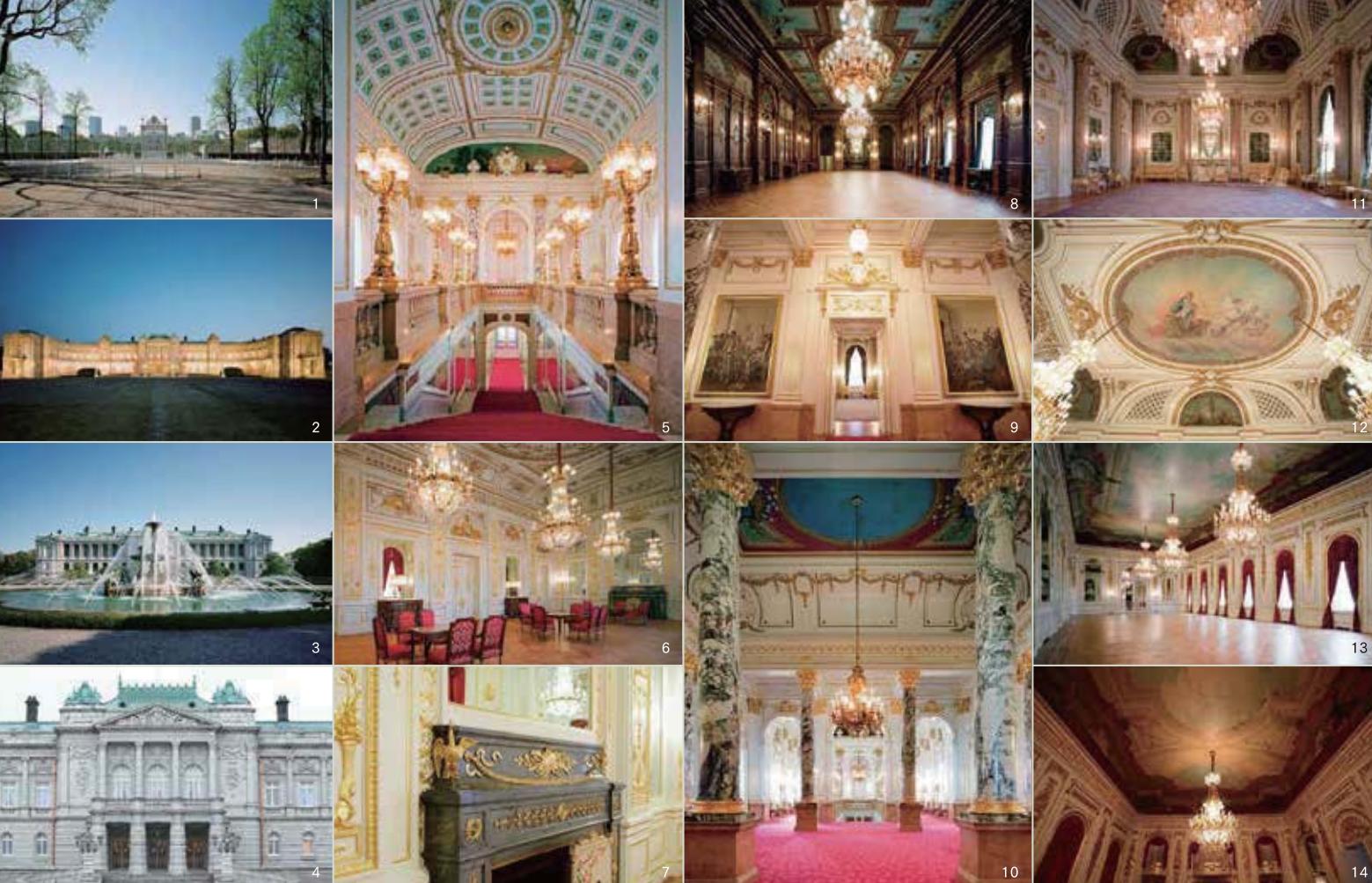
### 鉄骨補強を採用

明治31(1898)年、東熊は東宮御所御造営工事を総括する宮内省内匠

寮技監に抜擢されます。東熊はその前後から海外へ度々赴き、各國の宮殿建築を調査。そして東熊を設計者・総括者として工事は起工され、多くの職人や技師たちが力を尽くし、10年をかけて明治42(1909)年、石造および鉄骨煉瓦造2階建、建築面積約五千平方メートルの日本初の本格的な西洋風宮殿を竣工させます。

注目すべきことは、躯体に耐震のため煉瓦壁の中に鉄骨補強が施されたことでした。鉄骨はカーネギー社製で、柱・梁・小屋組に約三千トンの鉄材を使用。『月刊 文化財』555号によれば「小屋組は鉄骨トラスが組まれ、鉄骨母屋にヒノキ材を抱き合わせ、これに野地を張ってアスファルトフェルト下葺の上に銅板瓦棒葺」とあります。設備面で注目されるのは、自動温度調節装置付き温風暖房装置の日本初導入。東熊らの意気込みが伝わってきます。

外観の意匠はネオバロック様式。室内装飾にはフランスの18世紀末から19世紀初頭の様式などを採用。華麗な意匠を施した「朝日の間」「彩鸞



の間」などは純洋風を志向し、大理石や調度品などはヨーロッパの最高級品を輸入。同時に七宝焼きなど日本の伝統的な工芸美術も採用し、黒田清輝ら当時一流の芸術家・工芸家も腕をふるって造りあげました。

### ふるさと長州との絆

ところで東宮御所が起工された翌年、東熊がふるさと長州で関わってきた工事が竣工しています。それは山口の亀山公園に造られた旧藩主らの銅像建立。長州出身の伊藤博文による一大事業でした。

銅像製作者は日本の彫刻界の創始者ともいわれる長沼守敬。長沼への依頼には東熊が間接的にかかわっていました。銅像は戦時に供出されて現存しませんが、公園は残り、東熊を支えた長州との絆をしのばせます。

### 東宮がお住まいになることはなかった東宮御所

話を東宮御所(現迎賓館赤坂離宮)に戻しましょう。残念ながらそこに東宮がお住まいになることはなく、



「毛利 敬親銅像(山口市亀山公園)」(山口県文書館蔵)。現在は異なる作者による像がたつ

明治天皇が「贅沢だ」と感想を漏らされたという逸話も残ります。

その後、東熊は神奈川県庁舎などを設計し、明治天皇のご逝去に際しては桃山御陵などの造営を担当。そして大正6(1917)年、62歳での世を去ります。

同期生として競い合い、建築学会の会長となっていた辰野金吾は葬儀

の日、東熊を「宮廷建築家」と尊称し、哀悼する弔詞を捧げました。「此建物(現迎賓館赤坂離宮)や君が渾身の力を傾倒して築成せるものにして、広壯堅牢匹儕(ひっちゅう)世に罕(まれ)なる東洋唯一の近代式宮殿なり」「唯此建築を以てするも君を不朽に伝ふるに足る」。

### 明治以降で初の国宝に

平成21(2009)年、旧東宮御所は明治期において日本人建築家の設計による近代洋風建築の到達点を示すものとして明治以降の建物としては初の国宝に指定されました。

平成29(2017)年は東熊の死去から百年。迎賓館赤坂離宮は、辰野金吾の言葉の通り、東熊の名を不朽のものとしたと同時に、西欧にひけをとらない近代日本をつくるべく懸命に挑んだ多くの先人たちの志と情熱を物語ってくれます。

【参考文献】小野木重勝「日本の建築 明治大正昭和2様式の礎」1979、日本建築学会『建築雑誌』第31輯372号 1917、文化庁文化財部監修『月刊 文化財』No.555 2009、長沼守敬「毛利家の銅像」(山口県文書館蔵)など